

数学を選んで

柴田 泰輔

2019年3月学部卒

もともと数学を勉強しようと思い入った京都大学理学部ですが、一回生二回生の間は数学系に本当に進もうか非常に悩んでいました。というのも、「専門的な数学なんて役に立たないし将来性もない。そんなことよりもっと他に社会に直接貢献するようなことをやるべき。」というようなことをいろんなところから話を聞いていましたし、実際に当時は自分でもそのように考えていました。そういうこともあり、改めて進路を考えた時に自分にはもっと別に進むべき道はあるのではないかとという考えから、様々な講義にもぐったり学問に触れたりして方向性を模索していました。

当時取り組んでみたことでいくつか記憶に強く残っていることを書こうと思います。

例えば二回生の時でしたが、自分には化学が実は向いているのではないかと思い化学実験を履修しました。ところが、うまく計量できなくて実験結果がめちゃくちゃになったり、図が全然うまく書けなかったりと散々で余りの不器用さに自分に嫌気がさして無理だと悟りました。

同じく二回生のころですが、文系学問も進路としてありかもしれないと試しに神話論というものを履修してまして、そのレポート課題で一冊適当な神話に関する本を読んでレポートにまとめろというのがありました。根拠の無いの万能感にあふれていた私は、難解であることで有名なニーチェの『悲劇の誕生』に取り組むことにしました。そうしたものの、実際に読んでみると想像を絶して意味不明で学期末の丸一か月それにつきっきりで読み解こうと奮闘してみたのですが、結局ほとんど何もわからないままレポートを書き上げ、苦々しい気持ちでそれを提出したのをよく覚えています。

他にも物理に触れてみたり、半ば現実逃避気味に芥川文学にはまってみたり仏教の経典を読んだり、まあ色々やってみたのはいいのですが、結局趣味でやるにはいいが学問として本気でそこに進んで取り組んでいこうという気にはなれませんでした。

そんなこんなで自分にはとりあえず数学に進むしかないのだろうと感じ、二回生から三回生に上がる専攻配属決めの際に数学を専攻に決めました。

専攻を決めた後は完全に数学以外の学問は意識にも上らず、数学ばかり勉強していました。あまり真面目な性格ではないので、三回生の時は（こんなこと書いたら怒られるかもしれないですが）ほとんど講義に出席せず適当な時間に図書館などに行き勉強し、適当な時間に帰って寝るといふかなりお気楽な生活をしてました。そういったのんびりした勉強生活中で、自分の今後進んでやっていきたい数学の方向性を探せたのではないかと思います。また、先生は怖いものだと勝手に思っていたのですが、どの方々も親切に接してくださりました。

四回生になったら講究も始まり、他にも同時に色々な数学に手を出していたので三回生の時のようにのんびりとはいかず色んなものに追われてかなり忙しい日々で余裕が全然無かったのですが、その分集中的に知識を身に付けられたのではないかと思います。

さて、卒業も迫った四回生の春休み、追われるような忙しい日々から抜け出して精神的な余裕ができ、気分転換に大学入学当時勉強していた数学以外の哲学書や理学書などの学術書などを改めて開き勉強してみたところ、当時に比べて圧倒的に理解力があがって、学習効率が見違えるほど向上しているのを実感しました。これはおそらく、数学を通じて身につけた能力であるだろうと思われます。数学はそれ自体を通じ、難解な本や論文を読み解き概念を身に着け自分なりに理解し考えようと奮闘する中で己の思考と直に向き合い、それに対して論理の厳密さによるフィードバックを受けることのできる唯一無二の学問であるだろうと考えています。入学当初は数学を専攻することの意義について悩み迷っていた私ですが、学部四年間を過ごした今、それだけでも学部で数学を専門で学ぶ意義というものは大きいだろうと確信しています。